# 高校生の料理・食事における他者に対する思考・関心
## ――家族との社会的相互作用に着目して――

黒岩薫（お茶の水女子大学大学院）

1. 研究背景・目的

日本では現在、夫婦の1日あたりの家事関連時間には大きな差がみられ、特に食事の管理に関する時間は男女差が最も大きい（総務省 2017）。女性による家族の食事の支度に着目した先行研究では、家族の好みや習慣などを考えるといった「家族へ注意を向けること」は女性が生来持つ能力なのではなく、他者（家族）の観察や内省、試行錯誤の繰り返しといった一連の実践を通して発展させられていくものであると示されている（DeVault 1991）。また、料理は、家族に必要な栄養や好き嫌い、生活時間などを踏まえメニューを考えるという点で、「感覚的活動（sentient activity）」を伴ったケアである、と Mason（1996）によって論じられている。

本研究では、高校生の家庭での料理体験や食事をめぐる家族との相互作用に着目し、「他者に対する思考・関心」が高校生にどのように認識されているのか、またどのような行動にあらわれるのか、探索することを目的とする。

2. 方法

福岡県の公立高校に通い、かつ「家庭内で料理を手伝ったり、自分で料理をすることがある」という条件に合致した高校生21名を対象に、半構造化面接法によるグループインタビューを2021年1～3月に実施した。対象者には事前質問票への回答を依頼し、家族構成や家庭での家事分担状況などについて尋ねた。グループインタビューは対象者の都合のよい日時に応じてグループを分けて実施し、1グループあたりの人数は4～7名となった。インタビューを各1回実施し、1回あたりの実施時間は約2時間である。対象者には、(1) 対象者自身による食事に関する家事や料理の体験、(2) 家族による料理や食事に関する家事、(3) 家族のために食事をつくる上で大切だと思うこと、(4)「男性と料理」や「女性と料理」に対するイメージ、の4点について主に質問した。分析には、インタビューの録音・録画内容をもとに作成した逐語録を使用した。調査実施にあたって、お茶の水女子大学倫理審査委員会の承認を受けた。

3. 結果

対象者である高校生たちは家族との相互作用を通して、母親など家族の食事の主な作り手が、家族に対する思考・関心を多様なかたちで行動に反映させていると認識していたことが分かった。例えば、家族の食事の作り手が献立の希望を家族に確認したり、作り手のこれまでの経験から家族の好みなどを把握し献立に反映させていることを対象者らは認識していた。対象者たちは食事の作り手の行動を観察するだけでなく、自らの希望を食事の作り手に伝えたり、作り手に対して肯定的な反応を示すことで、食事の作り手に働きけてもいた。

一方で、対象者自身がケアの与える側、すなわち家族の食事の作り手と類似した行動を行っていることも明らかになった。例えば、食事の主な作り手の代替として家族の食事の準備を担ったり、家族の好みを把握したり、栄養面に配慮する様子もみられ、家族に対する思考を自身の行動に反映させていた。また、レシピ検索アプリやwebサイト、SNSを活用することで、対象者らが多様な料理体験を有していることも分かった。

文献

DeVault, M. L., 1991, *Feeding the family: the social organization of caring as gendered work,* Chicago : University of Chicago Press.

Mason, J., 1996, “Gender, care and sensibility in family and kin relationships,” Janet Holland and Lisa Adkins eds., *Sex, sensibility and the gendered body*, London: Palgrave Macmillan, 15-36.

総務省, 2017, 「平成28年社会生活基本調査　生活時間に関する結果 要約」, 総務省ホームページ, （2018年9月12日取得, http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/youyaku2.pdf）.

（キーワード：高校生、料理、ケア）